

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト(加藤) e-mail:sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



祇園祭宵山(白楽天山) 撮影:佐藤洋一郎

文明の端っこから 21 世紀的な生き方を紡ぐ

笠松浩樹 (島根県中山間地域研究センター)

文明の端っこから 21 世紀的な生き方を紡ぐ

笠松浩樹（島根県中山間地域研究センター）

最近、マスコミなどで限界集落という単語が目につくようになりました。限界集落の統一された定義はありませんが、一般的には高齢化率 50%以上で活動の維持が難しくなった集落を指し、主に農山漁村に多く存在しています。その問題点は、生活に必要な施設や商業集積地から遠く、道路や交通事情が悪く、働く場がないなどが挙げられます。

その一方で、このような集落に住む古老は、里山で暮らす技術をたくさん持っています。年を取っても現役で田畑を耕し、食料のほとんどを自給している方も多く、野菜は勿論、味噌、こんにゃく、豆腐などの加工品づくりにも長けています。

島根県中山間地域研究センターでは、限界集落が存在するエリアでの社会実験を 2007 年夏に開始しました。人口約 1,500 人の浜田市弥栄自治区（旧弥栄村）をフィールドに、マネージャーが新たに住み込み、大学生達が作業部隊「里山レンジャー」として活躍しています。これまでに、高齢者世帯の草刈りや除雪、耕作放棄地の復興、食文化と農の関係を探る調査、農産物や加工品の販売実験などを実践してきました。

手探りで進める活動は驚きと感動の連続です。昨年秋のイベント時には、地元の方々に全て弥栄産の食材でパーティー料理をつくっていただきました。竹でつくった食器も弥栄産。100%の地産地消料理ができる豊かさを実感しました。



全て弥栄産の食材でつくった料理

また、13年間耕作していなかった農地を菜の花畑に戻しました。4月には一面黄色の花畑が広がり、集落の景色が一変しました。農地を所有する独居のおばあさんは、作業に通う学生に昼食をつくってくれるようになりました。「食べてくれるのが嬉しい」とのことですが、学生に食事をつくることでご自身の食生活も良くなるという効果が出たところです。



遊休農地（左）を復興させて菜の花畑（右）に転換

活動を始めて間もない頃、学生の中には地域の方々と話ができない者もいました。ある学生が、「おじいさんは同じ日本人で日本語を話しているのに、言っていることがわからない」と漏らしたことがあります。「おじいさんが話していることは僕にとって実感が湧かない、だからわからない、でも本当はもっと話したかった」とのことです。20歳前の彼にとって、山奥で暮らす古老の日常は別世界のように映ったのかもしれませんが。

活動を初めて半年以上が過ぎ、このように数々のエピソードが生まれています。コミュニケーションを取ることのできなかった学生も、住民との作業を通して対話が進むようになりました。今年の目標は、梅雨明けに農地で火入れを行い、そこでの食料自給を試み、薪などのL. S. P. (Local, Simple and Popular) エネルギーで化石燃料に頼らず暖を取る暮らしを組み立てることです。そのためには、古老の知恵と技を学びながら新たな技術を融合させて、有効に資源の活用を進める必要があります。

限界集落は「現代文明の端っこ」と表現できるのかもしれませんが。それは利便性が悪いところに立地しているからではなく、石油文明に乗りきらなかったことを意味します。

原油や食料の価格高騰に翻弄され、都市近郊の新興住宅地では急激な高齢化が進み、成長重視路線が行き詰まった今の社会を見た時、本当に限界なのは現代文明の方なのではないかと感じます。今は農山村も石油がなければ生活していけませんが、社会全体を見た時に、限界集落が存在するエリアは最も希望が持てる場所ととらえることもできます。

資源を消費する時代から資源をつくる時代へ。日本は遠くない将来にそんな転換が必要です。そして、その突破口は見えつつあります。20世紀に文明の端っことなり、この半世紀で急速に消えていった文化や知恵や技術が今も息づいている限界集落から、21世紀的な生き方を始めようと思います。